



高田 和さん

(滋賀県発達障害者支援センター 主任相談支援員)

北海道生まれ。大学では障害福祉を学び、実習に行かれた知的障害者の入所施設で、障害のある方のストレートに表現する姿に魅力を感じられたそうです。大学三回生の時に、一冊の本と出会われます。その本との出会いがきっかけとなり、滋賀県に就職されることになりました。就職されてからは、主に障害分野に携わり、通所施設の支援員、居宅介護、相談員など様々な部門を経験されてきました。現在は、滋賀県発達障害者支援センターの相談員をされています。

今の仕事に繋がる原点

齋藤 高田さんが障害福祉に携わろうと思ったきっかけは？

高田 高校生の頃、次の進路を考えていた時に、図書館に通ってたんですけど、その時になぜか、障害福祉とか人権とか女性問題のところに惹かれていって、社会福祉学部に行くと思ったことを学べるかもしれないと思って大学を選びました。二年生のゼミではハンセン氏病を、三年生からは障害福祉を専門にしている先生のゼミを選びました。実習先が知的障害のある方の入所施設だったんですけど、その時の利用者の姿に惹かれたところがあり、今の仕事に就いていると思います。

齋藤 知的障害のある方の入所施設だったら、知的障害の重さとしては、結構重かったんじゃないですか？

高田 その頃は重い、軽いも分からなかったですけど、今考えると行動障害のある人が多く居たんだろうなと思いますね。突然食事中に、頭を壁に打ちつけたりして驚いた記憶があります。一方で、何かきつと理由があるんだろうなと思うこともありました。周りが騒がしかったり、突然話しかけ

られてイライラしているように見える事もありました。

山本 その知的障害のある方の施設に実習に行かれたのは、偶然だったんですか？

高田 偶然ですね。一か月間、週末以外はずっと泊まり込みでした。他の人は家から通えるところで探していたのですが、私は泊りたくてここを選んだんです。

齋藤 じゃあ、四六時中勤務してた感じですか？

高田 そうでしたね。夜の食事とお薬の確認が終わってから、職員室で職員の方が色々な事を話してくれました。いろんな方の考えを聞いたのは良い経験だったと思いますね。

山本 他の人が家から通える実習先を希望する中で、なぜ高田さんは泊まりたいと思われたんですか？

高田 社協とか病院の実習が人気だったんですけど、私は一緒に暮らすみたいなのをやってみたいと思って選びました。

山本 そうでしたか。大学での実習で知的障害の方の施設に行かれて惹かれるものがあり、今の職場に就こうと思われるきっかけは何だったんでしょうか？

高田 きっかけは大学三年の頃に、大学の図書館で『僕らは語り合った―障害福祉の未来を―』^①という、理事長でもある北岡さんた

① 『僕らは語り合った―障害福祉の未来を―』……二〇〇四年二月にぶどう社より発行された著書。北岡賢剛、福岡寿、曾根直樹、根来正博の四名による共著。

ちが書いた本を偶然読んだことですね。その時は、こんなことを考えてる人達がいるんだなと思って終わっていたんです。その後、就職活動の時にオープンスペースがーと②の求人を見つけて、あの時読んだ本に書いてある所だとすぐに頭の中でつながって、就職課の職員の方に聞いたら同じ大学の先輩が一人働いてたんです。その方に電話をしてどんな場所か問い合わせてみると、「良いところだし来てみたら？」と言っていただいたので、採用試験を受けたという流れですね。

山本 でも、二〇代で北海道から滋賀県って大きな決断じゃなかったですか？

高田 その時は、勇気を出してという感じはなくて、どこにいても大切なものは同じだみたいな感覚を持っていたので、自分にとって大きなチャレンジという感じではなかったですね。周りの人から言われて、そうかもしれないと気づく感じでしたね。

山本 ご両親には、反対されなかったんですか？

高田 「行く事にしたから」と伝えた時は、確かに驚いていました。母は、私の事よく分かってくれていて、止めても聞き入れないと思って、特に反対しなかったです。でも、後から聞くと父は母に色々と言ってたみたいです。「どうして滋賀なんだ」とか（笑）。

齋藤 まあ普通の反応ですよね（笑）。

高田 でも、「色々言わないでちゃんと送り出しな」みたいな事を、母が言ってくれていたと思うので、父から反対の言葉は無かったです。「ご飯を食べるように、車に気をつけるように」と言って、送り出してもらいました。

山本 でも、それだけその本との出会いが大きかったという事ですかね。

齋藤 あの本は、滋賀県以外の所でも実践をされている方も執筆されているけど、なぜ滋賀を選んだのですか？

高田 福祉のことが書いてある本ですけど、北岡さんが書いているのはそれだけじゃない感じがしました。学生の頃は、福祉の世界を誰かのために何かをしてあげるという側面でしか捉える事ができていなかったのですが、どうやったら人は楽しく生きられるかみたいな事が書いてあった気がして、それがたぶん残ってたんだと思います。

山本 単に障害福祉のことだけではない事が書かれているのではないかと？

高田 はい。私にはそう読み取れたんです。

山本 話が少し戻るんですけど、大学の頃の実習では、利用者の方のようなどころに惹かれたんですか？

高田 表現がストレートなところですね。壁に頭を打つ様な姿に驚いてしまいましたし、「感動しました」と客観的

に見ているだけではいけない場面もありました。飾らないし、遠慮してストレートに出せないような事を出しているような気がして、その姿がすごく魅力的だと感じてましたね。

山本 高田さんのように、行動に理由があると思える人もいれば、そうは思わなかったり思えなかったりする違いは何なんでしょうかね？

高田 さっき話した実習先での食事場面は、実はその方は、葱が嫌いだったそうなんです。それなのに、葱がのつたうどんが出てきたんです。次の瞬間には、テーブルに頭を打ち始めていました。もし、事前に葱が嫌いというのが分かっていたら取り除く事が出来るし、頭を打つのは違うやり方で嫌いだと伝えてもらえないだろうか、もしくははこちらがキャッチできるように、何かないのかなと漠然と思った記憶があります。その当時は、行動分析の知識も私にはなかったですし、当時の職員の方にも言えないままでした。

大事にしていることは変わらない

山本 高田さんは、就職されてから今までどんなお仕事でされてきたんでしょうか？

高田 最初は、バンバン(③)という通所施設で支援員をしていました。その後、居宅介護と行動援護のヘルパー、相談支援事業所の相談員を経て現在に至ります。

山本 そうなんですね。色々な部署を経験されたという事ですけれど、どの場所に行っても、大事に思っておられる事など何かありますか？

高田 そうですね。話が飛躍するかもしれませんが、N O O M A (④)に行って作品を鑑賞すると障害の有無に関係なく、人には誰かの心を動かす力があるんだなとも感動します。それと、自分の事を分かってもらいたいとか、認めてもらいたいと誰もが思っていて、そのことを、困難な状況にある人に出会えば出会うほど、ちゃんとそこに気づける人でありたいと思っています。

山本 困難な状況というのは、本人が置かれている状況の事ですか？

- ② オープンスペースがーと……旧社会福祉法人オープンスペースがーと。
- ③ バンバン……生活介護事業、就労継続支援A型事業を行なっています。
- ④ N O O M A……正式名称は、ボーダレスアートミュージアムN O O M A。障害の

ある人の表現活動の紹介に留まらず、一般のアーティストの作品と共に並列して見せることで「障害者と健常者」をはじめ、様々なボーダー(境界)を超えていくという実践を試みています。

高田 そうですね。引きこもりや生活困窮、生きづらさをたくさんの場面で感じる方でも、掘り下げて行くと必ず力を持つておられますし、誰かから認めてもらいたい気持ちがあると感じています。

関係性を築いた上での、気づき

山本 支援者として、「気づくこと」を大切にされているという事で、そのことについてもう少し伺いしてもいいですか？

高田 気づく人がいる事で少しでも安心が生まれて、その方が力を蓄えたら自然と次の行動に繋がったり、表情が和らいだりしていく事があるだろうなと思っています。もちろん、少しでも分かりやすく情報を伝えたり、選択肢を提案する事は大事な事です、最終的に選ぶのはその方だと思っうんですね。情報や選択肢を整える事プラス、その人が少しでも元気になっていく事が出来たらいいなと思っています。

齋藤 その関係作りを、築く為に心がけている事とかはありますか？

高田 これだけでは、十分ではないと思うのですが、名前を呼ぶのは大事に思っていますね。ちゃんとそこにいる事

を分かっているというメッセージなような気がするんですよね。

齋藤 その感覚はどういう時に身についたのでしょうか？

高田 祖父母を亡くしてから、寂しいと思った時に理由を考えたら、名前を呼ばれる音の記憶があつて、もしかしたらもう二度と名前を呼んでもらえない事が一番寂しいかもしれないと思つた事がありました。

山本 そこに気づかれてから、その名前を呼ぶ時に、込めるメッセージ性みたいなものが変わってきたという事ですか？

高田 そうですね。元々ちゃんと名前と呼ぼうというのは持つてたんですけど、その人の「名前」って特別なものだから大切にしたいな、と改めて思うようになったかもしれません。

山本 高田さんのお話を伺っていると、非言語的なものも大事にしておられるなというのを感じます。

高田 そうですかね。感覚的なところがあるので、それを言葉にするのにも苦労しますね。

山本 相談の仕事とかされていると、その場ですぐに言葉にしないといけない事があると思うんですけど、言葉にする力はどうのように身につけて来られたんですか？

高田 まだ出来ていないと思つていて、どちらかと言うと

苦手意識があります。心がけているのは、一方的に解釈してしまわないようにする事です。自分が捉えた事実や感情を言葉に直したり、相手に伝えるのは本当に難しい事だなど、日頃の相談業務で感じています。

ストレートな表現の影響力

山本 高田さんは就職されて八年目ですが、これからどんな事をしていけたらと考えられていますか？

高田 音楽祭(⑤)を見に行った時のことですが、近くに一、二歳ぐらいの子どもが居たんです。途中でぐずり始めると、同じ年くらいの子どもがそれを真似し始めて、お子さん同士が共鳴して声を出し合ったりしてたんです。私はそのことに感動してしまって、一、二歳の子ども達が解放されたと言うと変ですけど、きつと障害のある方のパフォーマンスの力が会場に伝わっていたんだらうなと思っただんです。それは、周囲の大人の方々もぐずり始めた子ども達に慌てたり、イライラしたりでもなく、しばらく楽しんでるような姿からも感じました。色々な人の心を動かす

のは、障害のある人のすごい力だと思ってさらに感動してしまいました。相談支援の中では、また違った形になると思うのですが、障害のある方の力を伝えていけるようにしたいですね。また、その人に合ったステージを作れるように仕事をしていきたいと思っています。

本人の代わりに決めちゃいけない

齋藤 その高田さんが大事にしている気づく感覚は、何によって養われてるのででしょうか？

高田 自分ではまだよくわかりませんが、親がそんな風な育ててくれたんでしょね。障害の重い方でも、自分の人生を自分で決めていく力はあると思います。上手く説明できないのですが、AとBがあつて、Aと選べる事だけが選んじやないとも思っています。また感覚的な話になりますけど(笑)。

齋藤 どんなに障害が重くても必ず選ぶ力、大きく言うとその人の可能性があると信じて疑わないのは、数々の障害のある人と会って確信を得てきたのか、最初に出会った時

⑤音楽祭……糸賀一雄記念賞音楽祭。糸賀一雄記念賞の受賞者を県民でお祝いすることを目的に始まった音楽祭。県内の、「うた」、「打楽器演奏」、「ダンス・身体表現」の表現活動ワークショップに参加する障害のある人やその支援者等、総勢二〇〇人余りが出演しています。平成二七年度で第一四回を終えました。

からそもそもあったものなのか、どっちなんでしょうね。

高田 なんとなく私が勝手に決めてはいけないという感覚は、最初からありましたね。代わりに何かをする、代わりに決めるというのは責任重大な気がして。何度か相談の場面で、どちらがいいか決めて欲しいと言われた事がありました。選択できるように情報を伝え直したり、喋って喋ったりするようにしています。考えたり納得できるようにするプロセスと一緒に伴走するような気持ちでいるように、心がけています。

齋藤 元々障害がある人と出会った時から、代わりに決めちゃいけないという感覚があつて、八年経て多様な障害のある人達との出会いを経てきた、今でも変わらずに持ち続けられるのは？

高田 れがーとという職場にいたことが一番大きいですね。れがーとは、本当にとことん一人の人と向き合う事、それは利用する人だけじゃなくて職員の人ともですけど、それを大切にしてる所だと思えます。考えたりどういう事なんだろうと、立ち止まる人を大切にしてくれる場所だと思つています。

齋藤 そのことで何か具体的な出来事とかはありますか？

高田 そうですね。サポートセンター(⑥)で相談員をしていた時に出会った重度心身障害のある方のご家族の話が

あつて、高齢の両親とその方で暮らしておられたんですね。お母さんが病気をされてご本人と一緒に暮らすこと難しくなつて、親御さんも入所施設の利用を考えておられる時でした。行政や入所施設の方とケース会議を開いたりする状況で、相談員として関わっていたんです。その経過を中島さん(⑦)に話す機会があつて、その時に「それ、本人はどう思っているか考えた？」と言われて、ハツとした事がありました。ちゃんと立ち止まって考えたかなと言われると、私は本人の代弁者は家族だと思ひ込んで、家族の人が言っている事を私は支えようと思つてたんです。でも、もう一つ深く掘り下げると、本人にちゃんと出会わないといけなかつたんだなというのは思つたりしましたね。

齋藤 本人とは、一度も出会わなかつたのですか？

高田 自宅や通所施設、短期入所先で何度も出会ってるんですけど、そういう事で出会ってないというか、「新しい生活の場所のことですが……」と問いかけてはしないままお会いしていた気がしたんです。そういつた事を投げかけてくれる先輩が、れがーとは他にもたくさんいるんです。どういう意味があるのか、丁寧に、またはさりげなく話してくださる先輩がいたので流さずにいけたと、今感じますね。教えてもらった事を一生懸命やっていくのと、私自身

そういう事を丁寧に伝えられる人でありたいなと思っています。
ます。

山本 今日、長時間に渡ってありがとうございました。

⑥ サポートセンター……正式名称は、甲賀地域ネット相談サポートセンター。障害児（者）相談支援事業・計画相談支援事業・地域移行支援事業・地域定着支援事業を展開しており、障害のある人や、家族にとっての、日々の暮らしの中の困り事

の総合相談窓口を担っています。
⑦ 中島さん……中島秀夫氏。社会福祉法人グロー理事。相談支援における、アウトリーチの第一人者でもあります。